普明國師畫像

京都文科大學所藏

最初此畫像を展いて天窓や肩のあたりの現れた時、夢窓國師によく肖て居ると見た私は、夢窓の愛姪春屋妙葩卽ち智覺普明國師であつたので、遽に血統は爭はれぬと思つた。彼れは三歲の時、始めて夢窓に心經を授かつてから、其提撕誘掖に依つて一代の巨匠となつた。足利義滿から相國寺の住持に請ぜられて、夢窓を開山に追薦し、自ら其二世となつたのも、先師の洪恩に酬いる爲めであつた。夢窓の入滅は七十七の秋であつたが、彼れは更に一年を加へて七十八歲の長壽を保つた。天龍寺の造立供養に當つて山門との衝突史が夢窓の行狀を飾つて居るが如く、彼れが南禪寺の樓門建立から山徒嗷々の的となつて奮鬪したとも少からず異彩を放つて居る。夢窓には寡氏直義の强梗なる外護があつたが、彼れに對する幕府の擁護は屢ゝ挫折して樓門の撤却となつた。彼れは禪林第一の伽藍から衣を拂つて丹後の一山寺に隱れた。多數の門徒法眷も彼れに倣つて一時に退散した爲め、天龍寺以下の諸山は空虛となつたといはれる。管領細川頼之は再三彼れの歸山を迫つたが、彼れはこれに耳を假さなかつた。さしもの大政治家も彼れの默殺に遭うて其失脚を招いたのである。豪放なる義滿は重く彼れを用ゐて日本最初の天下僧祿とした。受度の弟子八千五百餘人、高麗使節千戶金龍等二十五人まで衣盂を受けて弟子の禮を執り、明の使僧祖闡克勤等書を寄せ物を贈つて敬意を表して居るなど、其隆々たる道望を偲ばせる。室町初期の禪風が叔姪でもあり、師弟でもあつた夢窓と彼れとの兩大德に依つて擧揚されたのも奇緣ではないか。此畫像は神采奕々、眞に肖像畫の好標本である。

脚 頭 下 事
不 曾 覆 藏
眼 張 三 角
口 欠 四 方
芥 室 叟 自 題

との自贊にも其機鋒の閃きが見ゐる。芥室は彼れが居室の名である。【三浦】